

No. 1112

資源を大切に

4月30日「資源とエネルギーを大切に作る国民運動」中央連絡会議結成総会が開かれた。その席上福田副総理は節約を訴えた「このような世界状況の中で日本が生き残るためには、省資源省エネルギーに徹するしかない。国民一人一人はもちろん国や企業もこの意識に徹しなければなりません。」

資源回収業者クズ屋さんの代表として参加した中平さんは、集めた古紙や鉄くず、プラスチック、ゴムなどが営業として成り立たない程安い値で取引されているのは、資源の再利用を活かそうにもむざむざゴミとして焼却しなければならない実情を訴えた。戦後東京だけでも1万軒あったクズ屋さんも今では減る一方で千軒あるかないかだ。その多くが転業を余儀なくされた。川崎でくず屋を営んで40年になる中平さんは、新聞雑誌が1キロ6円、回収の際には1キロ2円か3円だ。これでは、各家庭でも古新聞や雑誌をとて出そうという気にはならないし、結局はゴミとして焼却されてしまうという。その量は計り知れない。なんとかしようとして川崎市内のくず屋さんが集まって流通ルートを整備し、安定供給と業者の生活を守るための、市役所や学校の協力を得て、集団回収をはじめた。そして備蓄場を設けた。去年の12月からはじめ約半年でようやく軌道にのった。後は、供給先販売ルートの確立だけだ。ほとんどの原料を輸入に頼らなければならない日本の産業が資源の再利用を活かしてこそ省資源省エネルギーの道は開かれるという確信をもって今後もこの運動を続けていくという。

不況と闘う

5月1日東京代々木公園で開かれた第46回メーデー中央集会。不況を反映してか「生活を守れ」「首切り反対」など苦しい生活を訴える旗やのぼりが翻った。

今や日本全体をおおう不況、日本最大の総合電機メーカー、日立製作所とその下請け企業が集中する茨城県日立市もその例外ではない。下請け企業のひとつ菊勝電子は自らが身体障害者の菊池庸哲社長が手足の不自由な人が働ける職場をと、二年前理想に燃えてつくった会社だ。しかしやっと事業が軌道に乗りかけたところ、今度の不況に襲われ仕事は四分の一、従業員も半分に減らさざるをえなかった。菊池さんは訴える。

「近所の主婦だけが相手だと不況にがまんすることもできるけれど、身障者にとっては生命にかかわる問題です。仕事さえあればなんとかやって行けるのですが……、自分の力だけではできない問題が多すぎます」

日立職業安定所には連日失業者がおしかけ、必死に仕事を求める老人や婦人の姿があとをたたない。庄司事業所課長は

「不況のしわよせは、どうしても高年令者、家庭の主婦など弱者を中心に影響を受けがちだ。解雇するにしても身心障害者母子家庭の主婦などはあくまで解雇しないように指導している」

とは言え、菊池さんが期待する政治のぬくもりはここまで届いていない。若い頃列車事故で両手を失った菊池さん、わずかに動く義手を頼りに車を運転し、従業員の送り迎えから製品の納品、そして帳簿づけまで、ひとりで事業をとりしきる。いつ終るともしれない不況の嵐の中で菊池さんは闘い続けている。